

ブレヒトとデュレンマット

酒井謙一

Brecht and Dürrenmatt

By

Kenichi SAKAI

Department of Applied Biology

(平成14年8月28日受理)

I

戦後スイスを代表する作家であるフリードリヒ・デュレンマット (Friedrich Dürrenmatt. 1921-90) は、一時期「比類なきブレヒトの死後、ドイツ語圏で最も重要な劇作家」¹と呼ばれた。また、劇のスタイルが寓意劇である等、ブレヒト (Bertolt Brecht. 1898-1956) との影響関係を論じられることも多い。しかし、ブレヒトのエピゴーネン的評価に対して、彼自身は一生戦い続けたのではなかったか。

ビーネク：あなたの名前はいつもいつもブレヒトと関連付けて挙げられます。あなた方に共通なものを突き止めようとされています。そもそもブレヒトに対してはどうなんですか。

デュレンマット：私はブレヒトによりどこを求めているわけではありません。でも、人は私をブレヒトと結び付けようとするのです。これは、人が私をいつもマックス・フリッシュに対抗させたり、あるいはその逆をしたりするのは、大きな違いです。(G.1.118)²

だから、たとえば『フランク5世』(Frank V. 59年初演) に対する『三文オペラ』(Dreigroschenoper. 28年初演) からの影響の有無を聞かれても、「シェイクスピア」(G.1.132)

の名前は挙げて、ブレヒトについては否定的な答えしか返さないし、また、『物理学者たち』(Die Physiker. 62年初演) の場合も、『ガリレイの生涯』(Leben des Galilei. 43年初演) が一つのきっかけになったのは、先ず間違いのないだろうが、デュレンマット自身は『オイディプス王』の影響を挙げるだけなのであろう。「自分が最も大きな文学的体験をしたのはアリストファネス」(G.1.118) だし、「自分に一番近いのはレッシング」(G.3.228) で、決して「ブレヒトではない」(G.1.118) のである。しかし、同時に、彼がおそらく最も意識し、こだわりを持ち続けたのも、その発言の多さから見て、先ず間違いなくブレヒトであっただろう。デュレンマットによれば、彼とはたった2回しか直接会ったことがなかったのにである。

これは、ブレヒトが非米活動委員会の喚問をのりくらしとかわしたあと、すぐさまアメリカを離れて、1947年11月から49年の5月までチューリヒを拠点に暮らした時期のことである。『迷宮一題材 I-III』(Labyrinth. Stoffe I-III. 90) ではこう言われている。

ところで、私は特にブレヒト通ではなかった。個人的には2度しか出会ったことがなかった。最初はチューリヒ劇場のクルト・ヒルシュフェルト (Kurt Hirschfeld. 1902-64) のオフィスにおいてであった。私はちょうど『ロムルス』(Romulus der Große. 49年初演)

を書いていたところだった。プレヒトが、ひげもそらずに、皮の上着を着て入ってきて、私と握手をした。彼は私と会えてうれしいと言って、また外へ出て行った。そのあと、私はクルト・ヒルシュフェルトに、あれはいったい誰だったんだと尋ねた。2度目はバーゼルで、1949年の『ロムルス』の上演のあとのことだった。私たちはそのあと食事に行った。そこにほかに誰がいたのかはもう覚えていない。プレヒトは私のそばに座っていた。彼はきわめて好意的で、私のゲルマン人の描き方が特に気に入ったと言っていた。私は遠慮がちだった。自分自身の仕事について議論するのは不慣れで、その頃は、たいてい表向きやっていることになっているだけで、実際はほとんど手をつけていない題材を話すのが一番好きなことだった。それに私は人を信じられなくて、当時プレヒトに対しても特によそよそしく対応していた。バーゼルス立劇場とチューリヒ劇場との間の確執も影を落としていた。おまけに、その頃の私は誰に対しても文句を言わずにいられず、不満たらたらであった。その上、私にはプレヒトのマルクス主義があまりに教条的に思えた。(WA.28.292)

長々と引用したが、両者が直接顔をあわせたのは、1956年にプレヒトが亡くなったこともあって、この2回だけであった。年齢が10歳違うせいもあるのだろうが、同時期にやはりプレヒトと出会ったフリッシュ(Max Frisch.1911-91)と比べると、デュレンマットの方はプレヒトに対して遠慮気味で、距離を置いている。このことはプレヒトも気づいていて、『ロムルス』初演を見てのアドヴァイスを、「教師然としたもの言いは願ひ下げだろうから」(BFA.29.520)と、直接デュレンマットに言わずに、演出家のヒルシュフェルトに手紙で間接的に伝えるという、才能豊かな後輩に対する細かい気配りをみせている。

両者が直接関係したのはこの2度の出会いと、有名な例の1955年のダルムシュタットの演劇会議くらいであるが、しかし、それにしては、デュレンマットは晩年に至るまで、何かと

言えばプレヒトを引っ張り出しては、今は亡きプレヒトの答えが返ってくるわけでもないのに、ああだこうだと議論を繰り広げている。非常なこだわりであるが、ここでは、死後編纂された4巻本の『対談集』(Gespräche 1961-1990)や『迷宮—題材I—III』、そして、大変な意欲作でありながら、非常に不評であった『加担者』(Der Mitmacher. 76)の「後書きの後書き」中でのプレヒトに関する発言などを拾いながら、デュレンマットのプレヒトに対する思いを検討してみたい。その際に、彼が一番触れているのが、自らの『物理学者たち』とプレヒトの『ガリレイの生涯』の関係についてであるので、このあたりを中心に論じていきたい。

実は、この問題については、すでに一度ごく簡単に述べたことがある³。ただ、そこでは『物理学者たち』成立時の影響関係についてだけであった。デュレンマットは、この作品が大成功を収めたあとも、晩年に至るまで、プレヒトとの関係やこの二つの作品について何度も考察をめぐらせている。それで続編という形で再度取り上げるのである。

その際に、いろいろな発言を時間の経過を追って考えるというやり方もあると思うが、ここでは、先ず問題点を大雑把に次の3点に整理して、それについて論じていくことにしたい。

- (1) テーマの違い。『物理学者たち』の中心テーマは科学者版『オイディプス王』である。これは、デュレンマットが、プレヒトとの違いとして何度も強調している点である。
- (2) 自らと比べて、デュレンマットはプレヒトの物理学の知識に疑問符を打っている。
- (3) 『ガリレイの生涯』はプレヒトの自己弁明ではないのか。

以上の3点である。それぞれ別個に独立したものではなくて、互いに関係している。とりわけ(1)と(3)はそうだが、ここでは最初に(2)と(3)を取り上げ、最後に(1)を論じることにしたい。

II

先ず、科学知識の点に関してであるが、デュレンマットは作品の背景となる自らの物理学の知識にかなりの自信を持っている。ある対談で

は、『物理学者たち』を書きえた一つの「素地」(G.1.217)として、日頃からの物理学者たちとの交流を挙げている。

自分はずっと自然科学に関心を持ち続けてきた。非常にたくさんの物理学者を知っている。かなり彼らの問題、物理学の問題も分かる。大いに物理学者と議論もする。(G.1.217)

事実、大学入学資格取得のために勉強し始めた時期(WA.28.205)から物理学には並々ならぬ興味を抱き続けている。1979年には、アインシュタインの生誕100周年を記念してチューリヒ工科大学で『アルベルト・アインシュタイン』(Albert Einstein)という招待講演もしている。

このように自分に自信があるせいか、ブレヒトの科学知識に対しては疑問符をつけている。たとえば、『加担者』の「後書きの後書き」では、現代の論理学や物理学を重要視しない点では、ヒトラーと同じだとしてこういうことを言っている。

彼[ヒトラー]は、現代論理学者と現代物理学者の認識を、ブレヒトと同様にたいしたものではないと思っていた。彼は宇宙氷説(Welteislehre)を信じていた。もしナチが現代物理学をまともにとって、原爆を作っていたなら、世界史は、容易に、実際とは別の、もっと由々しい経過をたどっていたことだろう。(WA.14.320-321)

ブレヒトをヒトラーと並べて科学音痴呼ばわりしているが、かなりひどい言い方である。先ず事実を確認しておく、たしかに、ヒトラーは、ハンス・ヘルビガー(Hans Hörbiger.1860-1931)が提唱したこの怪しい宇宙創成説¹を信じていたが、しかし、だからと言って当時のナチ・ドイツが現代物理学の成果に無関心だったわけではない。良心的な物理学者たちの微妙な舵取りで原爆の開発には向かわなかったというのが真相である。

また、ブレヒトには、ヒトラーと違って、オ

カルト趣味はなかった。科学技術の成果にも並々ならぬ関心を抱いていた。それまでにも、自動車、ラジオ、映画、飛行機といった20世紀前半のめばしい科学技術の成果は、あまり時をおかずに的確に作品に取り上げていた。『ガリレイの生涯』を書くにあたって、オットー・ハーン(Otto Hahn.1879-1968)の核分裂発見の知らせを受けて、翌39年2月27日にデンマークのラジオで放送された、ニールス・ボーア(Niels Bohr.1885-1962)の研究所の物理学者たちの対談を聞いて、核分裂が持つ意味を承知していたし、ガリレイの伝記的事実についても、リプリント版が今でも簡単に手に入る、定評のあるエミール・ヴォールヴィル(Emil Wohlwill)の2巻本を中心にきっちり押さえていた。悪い冗談で、ヒトラーのオカルト趣味と同一視され、「ブレヒトの一番いい、最も重要な作品の一つだが、科学が問題になっているわけではない」(G.1.187)などと言われる謂れはないのである。

もちろん、ブレヒトとデュレンマットの間に情報量の差があるのはやむをえないことだろう。それが、デュレンマットの発言の根拠になっているのかもしれないが。ブレヒトの場合は1945年の広島と長崎に対する原爆投下の知らせにショックを受けて、初稿を政治に屈した最初の物理学者ガリレイを断罪する内容に書き換えた。マンハッタン計画の内幕などは、戦時中でもあり、全く知りえなかったので、一般的に科学者の責任を問う内容に変えたのである。『『原爆時代』がデビューする』(BFA.24.241)と同時に「近代物理学者の伝記」(BFA.24.241)をこのように読み替え、普遍的なテーマのすぐれた作品が書けたというのは大変なことだと思う。ただし、デュレンマットは、原爆投下を機に政治に屈した最初の物理学者ガリレイを断罪するというブレヒトの狙いは的確には捉え切れていない。政治情勢もあって、別の問題の方に目が向いている。これについては、次に(3)の問題を論じる際に触れる。

さて、本来の問題に戻って、『ガリレイ』の2稿と『物理学者たち』との間には、ほんの15年ぐらいの差しかないのだが、情報の量は決定的に違う。それは、この間に、たとえばユ

ンク (Robert Jungk.1913年生まれ) の『千の太陽よりも明るく』(Heller als tausend Sonnen.1956) などといったすぐれたノンフィクションが出版されて、なお、デュレンマツはこの本の書評を書いているが、原爆を作った科学者たちの心の動きまで含めて、マンハッタン計画の内幕がかなり詳しく分かってきたせいである。

この劇の主人公メービウスは、人類の破滅につながる自分の大発見が悪用されることを恐れて、狂人を装って精神病院に入院するが、これは、たとえば12人の学者が手を結べば原爆の開発が防げたとハイゼンベルク (Werner Heisenberg.1901-76) が言っている⁵ように、現代の最先端の知識は複雑で、並みの政治家なんかには理解できるものではないので、メービウスのようなやり方も一つの可能な選択に思えたからである。しかし、その精神病院の院長が狂人であるという「予測しがたい偶然」のために、事態は「考える限り最悪の展開」(WA. 7.91) をたどるのであるが、これもユンクの本に紹介されている事実を踏まえている。マンハッタン計画のスタートが切られたのは、戦時中のため互いにコミュニケーションがとれず、アメリカに亡命した物理学者たちがナチ・ドイツが核開発を進めているのではないかという疑惑を払拭できずに、ルーズベルト大統領に核開発を進言したためである。コミュニケーション不能という偶然で始まったこの計画は、「考える限り最悪の展開」をたどって、本来の標的とは異なる敗戦間近の日本に投下されることになったのである。こう見てくると、デュレンマツの『物理学者たち』が、ユンクの『千の太陽よりも明るく』を非常にきっちり踏まえていることが分かる。デュレンマツはブレヒトをヒトラーと並べて科学音痴扱いしたが、両者の違いは作品成立時の情報量の差に負うところが大きいのである。

III

次に、問題点(3)、『ガリレイの生涯』はブレヒトの自己弁明ではないのかについて検討してみよう。たとえば、デュレンマツはこう言っ

ている。

『ガリレイ』はどことなくもったいぶった自画像である。一人称形式の小説という意味ではなく、形を変えた自己告白という点でだ。これは、自分にとっては、本来のガリレイの事件よりも、ずっと刺激的である。(G. 1.187)

つまり、『ガリレイ』は、「科学の問題」ではなく「何か全く別の」(G. 1.187) 問題を扱っている。ブレヒトの「自画像」、「自己告白」だと、デュレンマツは言うのである。1975年のハインツ・ルートヴィヒ・アルノルト (Heinz Ludwig Arnold. 1940年生まれ) との対談では、筋作りの大変さから『ガリレイ』の話しになって、次のように言っている。

デュレンマツ：………お話しを作るのとても複雑なことです。その時におもしろいのは、作った話しが自分の状態、自己存在とどう関係しているかです。その点では、作った話しも全く具体的な状況の似姿なのです。

アルノルト：自分自身の状況のですね。

デュレンマツ：もちろん、自分自身のです。でも、そこに、あらゆる政治問題も含めて、全世界が反映できるのです。一つの偉大な、無理のない例は一本来退屈だが、おもしろい面もあるのですが—ブレヒトの『ガリレイ』です。これは自分自身を描いたものです。そこに描かれているのは、ブレヒトと党との関係であって、歴史上のガリレイとはほとんど何の関係もないのです。

アルノルト：ブレヒトの裏切りとの関係も描かれていますね。

デュレンマツ：裏切りとの関係もです。彼がガリレイに託して表そうとしているのは、大いなる懺悔です。でも、ガリレイは全くの別人です。ガリレイに見なくてはいけない問題も別です。その方が、ある意味では、ずっと愉快で、悪魔的なのですがね。(G. 2.127-128)

こう言って、ブレヒトの場合は拷問が怖くてガリレイは譲歩したが、自分なら、すでに寄贈を受けて手元にあったのに、ケプラーの『新天文学』を偶然怠けて読まず、天体の軌道を依然として円軌道と考えていたために、月食などをうまく証明できずに、学問的に屈したと取ると、デュレンマット流『ガリレイ』のアイデアを、さらに続けて説明している。

この自己流『ガリレイ』の部分はともかく、デュレンマットとアルノルトが、ブレヒトの『ガリレイ』を「党」や「裏切り」、「懺悔」と関係付けているのはどうしてだろうか。これは、ブレヒトが『ガリレイ』の第3稿にちょうど取り組んでいた1953年に生じた、いわゆる「6月17日暴動」時の彼の非難を招いた行動と、劇中のガリレイの台詞を直接結びつけたがため、全くの誤解である。でも、とにかく、事情を説明しよう。

まず、1953年の「6月17日暴動」であるが、これは、ノルマの引き上げに抗議したベルリンの建築労働者のストライキをきっかけに、自然発生的に全国に波及した騒動で、最終的にはソ連軍の戦車が出動する騒ぎになった。この騒ぎを聞いてブコウの別荘から急遽戻ったブレヒトは、社会主義統一党の書記長ヴァルター・ウルブリヒト (Walter Ulbricht.1893-1973) や首相のオットー・グローテヴォール (Otto Grotewohl.1894-1964) たちに手紙を出した。たとえば、ウルブリヒトにはこう書いて送った。

同志ウルブリヒト、

歴史は、ドイツ社会主義統一党の革命的焦慮に、敬意を払うことになるでしょう。

社会主義建設のテンポに関する、大衆との大々的な話し合いは、社会主義が獲得してきたものを精査して、確かなものにしてゆく道です。

このときにあたって、ドイツ社会主義統一党との私の連帯の念を、私はあなたに表明しておきたいと思います。

あなたのベルトルト・ブレヒト
(BFA.30.178)

ブレヒトは決して単純に党への連帯の念を表明したのではない。社会主義が獲得してきたものを精査し、確かなものにしてゆく「大衆との大々的な話し合い」を前提に、行間にこれが足りなかったせいだというブレヒトの批判が読み取れるが、党との連帯を表明したのである。しかし、党はこの手紙を巧妙に利用する。1953年6月21日付けの党の機関紙「新ドイツ」(Neues Deutschland) は、ブレヒトの先の手紙の最後のパラグラフだけを掲載する。

このときにあたって、ドイツ社会主義統一党との私の連帯の念を、私はあなたに表明しておきたいと思います。

このブレヒトの連帯表明は、西側の知識人の猛烈な反発を招くことになる。ブレヒト劇上演ボイコットの動きも各地に広まる。

たしかに、ブレヒトの状況判断にも問題がなかったわけではない。今日では、この「6月17日暴動」は、スターリン死後の党の新旧の路線をめぐる内部紛争の中で生まれたもので、結果的に旧体制が生き残る契機になったという見方が一般的である。しかし、ブレヒトはここに「ナチ時代の悪意に満ちた残虐な暴力」(BFA.30.183) 復活の危険性を感じた。だから、あわてて別荘から戻って、党への連帯の気持ちを表明したのである。一応、「大衆との大々的な話し合い」を前提にしているが、しかし、ファシズム復権への恐れから、それ以上党には強く迫らずに済ませてしまった。そのあいまいさを党の旧勢力が巧妙に利用したのである。

デュレンマットとアルノルトが『ガリレイ』の次の台詞を「党」や「裏切り」と結びつけ、ブレヒトがガリレイに託して「懺悔」していると取ったのはこのせいである。

科学者として私はほとんど唯一無二の機会に恵まれた。私の時代に、天文学は市場にまで達した。この特別な時期に、1人の男が節を屈しなかったなら、大きな影響を及ぼすこともできたであろうに。私が抵抗していたら、自然科学者は医師たちのヒポクラテスの誓いのような何かを行うことになったかもしれない

い。自分たちの知識はただ人類の福祉のためにしか使わないというあの誓いだ。……数年間は当局と同じ力を持っていた。なのに私は、自分の知識を権力者に引き渡して、彼らがそれを自分の都合で使ったり、使わなかったり、悪用したりできるようにしてしまった。……私は自分の職業を裏切ったのだ。私のしたようなことをしでかす人間が、科学者の末席を汚してはいけないのだ。(BFA. 5.284-285)

とりわけ、「私は自分の職業を裏切ったのだ」を「6月17日暴動」時の自らの行動に対する「懺悔」と取ったのである。

たしかに、この台詞だけ見ているとこう取れないこともないが、しかし、これは全くの取り間違いである。というのも、『ガリレイ』には、以前にも指摘したこと⁷があるが、大きく言えば三つの稿が残されている。その2稿は、アメリカ亡命中に、有名な役者のチャールズ・ロートン (Charles Laughton.1899-1962) と協力しながら、1944年から1945年にかけて英語で書き上げたものであるが、すでにそこに先に紹介した台詞があるからである。ヒポクラテスの箇所はないが、それ以外はほぼそのまま、最後の「私は自分の職業を裏切ったのだ。私のしたようなことをしでかす人間が、科学者の末席を汚してはいけないのだ」(BFA. 5.180) もそのまま入っている。1945年頃にはすでにこの台詞が書かれていたことから分かるように、「私は自分の職業を裏切ったのだ」は決して「6月17日暴動」に対するブレヒトの「懺悔」ではないのである。

もちろん、2稿のアメリカ版を簡単に見ることができるようになったのは、80年代の後半、ベルリン・フランクフルト版の全集が刊行されて以降のことであるので、デュレンマットたちの取り間違いはそのせいだと言えるかもしれない。しかし、ブレヒトはすでに事件発生直後の53年7月1日付けのペーター・ズーアカンプ (Peter Suhrkamp.1891-1959)宛ての手紙でも、6月17日にドイツ社会主義統一党に出した手紙の「最後の文が公表された」(BFA.30.182)と述べて、誤解を正そうとして

いる。これをきっかけに徐々にではあっても真相が明らかになってきつつあったのに、20年後に相も変わらず「裏切り」や「懺悔」とブレヒトを非難するのは的外れだと思う。

IV

それでは、最後に問題点の(1)、テーマの違いにいこう。『「物理学者たち」のための21ヶ条』の9条にはこうある。

計画的に行動する人間は、ある決まった目標に到達しようとする。偶然が人間にもたらす最悪の事態は、偶然によって、人間が自分たちの目標とは反対のもの、つまり、恐れていたことや避けようと思っていたことに到達する場合である(たとえば、オイディプス王)。(WA. 7.92)

この言葉から分かるように、『物理学者たち』の中心テーマは科学者版『オイディプス王』である。デュレンマットは、このことを、ブレヒトとの違いとして何度も強調している。

また、後にはもっと分かりやすく次のようにも言っている。

私は、科学と悲劇の結合は、そもそも『物理学者たち』で昔のオイディプス題材を採用したことによって生じたと思います。しかも、普通するように心理学的に扱うのではなく、オイディプス劇の構造を取り入れることによって。つまり、1人の人間が神託によって運命を知ります。彼はなんとかこの神託から逃れようとはしますが、そうすればするほどまさに神託の言葉通りになっていくのです。逃げようと思ったのに、実は運命の中に飛び込むことになるのです。(G. 3.156)

事実、主人公メービウスは、人類の破滅につながる自らの大発見の悪用をなんとかして防ごうと、狂人のふりをして精神病院にまで入るが、その女院長が狂っていて、結局、人類を破滅の運命から救えないのである。

この『物理学者たち』の「歴史的核」(G.3.156)となった出来事は、アインシュタインがルーズベルト宛てに出した、ナチの核開発の危険性に対する「警告の手紙」(G.3.156)である。これがきっかけとなって、いったんことが進み始めると、物理学者たちが何度かブレーキをかけようとしたが止まらず、「考えうる限り最悪の展開」を取って、広島、長崎に原爆が投下されることになったのであるが、そのあたりのことはユンクの『千の太陽よりも明るく』に書いてある通りである。

ただデュレンマットは事態のこういう成り行きを、ブレヒトのように物理学者に負わせていない。

物理学者は一般的に自分たちの考えることが世の中にもたらすやっかいなことについてはとてもよく承知しています。しかし、考えることが危険になったのは彼らのせいではありません。世の中のせいです。私にそれよりもっと関心があったのは、物理学者のオイディプス的状况でした。彼らは、自分たちの考えや研究がどういう結果を持ちうるのか、しかも、自分たちにはこの結果を妨げることができないということをよく知っています。今日、危険なのは、人間がその思考の発展、つまり自然科学や哲学の思考の発展と、倫理的に歩調を一にしてこなかったということなのです。こういうことを、私は今日の自然科学のオイディプス的状况という言葉で考えています。というのも、オイディプスも何が自分を脅かしているのか知っていましたが、この悲運から逃れることができなかつたからです。(G.1.218)

つまり、科学者に何ができるかは彼らが生きる社会と密接に関係しているので、「科学者が科学者でありうる社会の存在が肝心」(G.3.159)だとしているのである。これは、『物理学者たち』のための21ヶ条』の18条、「すべての人間に関係することを、1人で解決しようとする試みはすべて失敗せざるを得ない」(WA.7.93)や17条の「すべての人間に関わることは、ただすべての人間のみが解決できる」

(WA.7.92)に対応している。こういう点が、ブレヒトの『ガリレイ』との大きな違いだとデュレンマットは言うのである。

しかし、ここにはデュレンマットの誤解もある。彼は『ガリレイ』の中心問題を「科学にストップがかけられるか」(G.1.145)だと見て、ブレヒトはガリレイ個人に拷問にも屈しない英雄的な決断を求めたと解しているが、無論、ガリレイはそんな英雄ではない。ブレヒトとしては、ガリレイというアンチ・ヒーローを通して、科学者の問題や社会の仕組みの問題を考えさせたかっただけなのである。

以上、見てきたように、原爆の開発にまつわる科学者のジレンマというほぼ同じ題材を扱いつつも、ブレヒトとデュレンマットの間には、大きな差がある。この違いをデュレンマットは簡潔に次のように表現している。

ブレヒトは『オイディプス王』ではなく、『アンティゴネー』を改作し、批判可能なものに変えた。(WA.14.273)

ギリシア神話の題材は限られているが、オイディプス王とアンティゴネー、いずれの人物もテーバイの王家ラブダキダイ家にまつわる因縁話に登場する。神託で予言された運命を避けようとしたが、結局、予言通り父を殺し、母と結ばれたオイディプス王に対して、アンティゴネーはその娘である。オイディプス王が身罷つてのち、その二子が王位を争い、共に倒れる。アンティゴネーの伯父にあたるクレオンが後を継ぐが、攻め寄せた敵方の屍を葬ることを禁ずる。アンティゴネーはこの掟に逆らい、攻め寄せた側に属して倒れた兄を埋葬しようとして、死に処せられる。運命がもたらす悲劇『オイディプス王』に対して、『アンティゴネー』の方は人為の法と人間愛の対立を描いていて、同じ王家の話しながら中身は全く対照的である。この二つの題材になぞらえて、自らとブレヒトの違いを指摘しているのである。運命、あるいはより適切には、偶然の積み重ねによる最悪の展開を描くデュレンマットに対して、容易には解決しがたい、世の中の矛盾、それをめぐる政治的対立とそのジレンマを好んで取り上げるブレヒト

との違いである。

実際、ブレヒトはスイス滞在中に、ヘルダーリンの訳を底本に改作して、暴君クレオンにヒトラーを重ねた、『ソポクレスのアンティゴネー』(Die Antigone des Sophokles.48年初演)を上演しているが、一方、『オイディプス王』に対しては、ほぼ同じ頃にまとめられた『演劇のための小思考原理』(Kleines Organon für das Theater.49)の33のところでこう言っている。

私たちの目に触れる演劇は、(舞台上に模倣された)社会の仕組みを、(観客席の)社会の影響外にあるものとして示している。オイディプスは、当時の社会を支えるいくつかの原則にそむいて、罪を犯したために裁かれる。神々がそれを行う。神々は批判できない。胸に運命の星を抱くシェイクスピアの偉大な個々の人物は、無益で命に関わる発作的な狂気をとめどなく行う。彼らはわれとわが身にとどめを刺す。その破綻の中で穢れるのは死ではなく生の方である。このようなカタルシスは批判できない。いたるところに犠牲者の山。野蛮な娯楽。野蛮な連中にも芸術があるのはとっくに分かっている。でも、別の芸術を作ろう。(BFA.23.78)

運命や破天荒な人物を描いているために、観客席の影響外にある、批判なんか受け付けられない従来の演劇とは別のものを目指そうとしているのである。その従来の演劇の悪しき例の一つとして挙げられているのが、『オイディプス王』である。ブレヒトの傾向が知れよう。

デュレンマットが『オイディプス王』と『アンティゴネー』になぞらえた両者の違いを、「ブレヒトとの対決」としてはっきり打ち出したのが『巫女の死』(Das Sterben der Pythia)である。この話しは、最初、『加担者』の「後書きの後書き」の中で紹介されたが、後には独立した短編作品としても全集に収められている。

話しはまたもや『オイディプス王』である。現代はあまりに複雑すぎてイデオロギーでは切れないと、偶然を重視するデュレンマットらし

く、「運命の概念なしに」(WA.14.271)、「運命を偶然に置き換え」(WA.14.271)で語って、オイディプスの事件の真相を明らかにしようとしている。

ところで、元の劇の中では、オイディプスに関して、三つの神託が下される。父ライオスに対しては、男の子をもうけてはいけない、生まれた男子は父親を殺すだろうという神託が下され、オイディプスに対しては、父を殺し母を妻にすることになると言われ、さらに、テーバイに広まる疫病の原因である穢れをはらうために、ライオス王の殺害者を罰せよという神託が下される。これがいずれも予言通りになったのが本来の悲劇の方だが、この短編小説では、巫女パニュヒスは、「想像で、気まぐれに、思い上がって、まさに無礼に厚かましく、要は破廉恥にも冗談半分に」(WA.14.311)こういった神託を下す。彼女は自分の神託なんか全く信じていない、むしろ、信じている連中をからかってやるぐらいのつもりである。しかし、これが「信じられないような偶然」(WA.14.309)が重なって当たる。

たとえば、オイディプスには、夕刻の仕事じまいの頃に来たので、「悪意に満ちた気まぐれ」(WA.14.274)から、父を殺し母を妻とするという「できるだけ無意味で、起こりそうもないこと」(WA.14.274)を予言する。ところが、数年後、娘アンティゴネーに手をひかれてアポロンの神殿に戻ってきた、今は盲目となったオイディプスは、「あなたの神託は的中しました。父を殺し、母イオカステと結婚しました」(WA.14.281)と言う。

巫女はオイディプスのことはすっかり忘れてしまっていたが、神殿の記録を見てようやく自分が下した神託を思い出す。どうしてあんな起こりそうもない神託が当たったのかと思いをめぐらしていた巫女は、突然自分に死が迫っていることに気づく。厳粛に死を待つ巫女のもとに、次々と幻が訪れて、オイディプス事件の各人各様の真相を語る。なかには、オイディプスは実はスフィンクスの息子だったというのまでである。結局、どれが真相か分からないのであるが、これが、この作品の内容である。

ところで、この作品にはもう1人重要な人物

が登場している。予言者 (Seher) のテイレシアスである。彼は、この小説の中では、予言者らしく見せるために盲人を装う (WA.14.295)、「ギリシア最大の陰謀家、政治家」(WA.14.277)である。彼は「理性的な人間」(WA.14.296)であり、「理性を信じているからこそ、神々への非理性的な信仰も理性的に利用できる」(WA.14.296)と考えて、腐敗した貴族社会を民主主義へと改善するために神託を利用する。神官を買収して、自分が書いたものを嫌がる巫女に無理やりお告げとして言わせるのである。

先に挙げた三つの神託のうち、父を殺し母を妻とするという神託以外は、いずれもテイレシアスの謀略的な意図を込めた神託である。息子に殺されることになるというライオス王に対する神託は、独裁者的傾向を持つ後継者クレオンの登場を恐れての警告だし、疫病の穢れをはらうためにライオスの殺害者を除けという神託も、テイレシアスはクレオンがライオスを暗殺したと信じたがためである。しかし、「信じたい偶然」が重なって、事態は別の進展をみせる。

今や忠実なクレオンがカドメイアを支配し、全体主義の国家を建設している。私が避けようと思っていたことが、現実のものとなったのだ。(WA.14.302)

テイレシアスが緻密に立てた計画は、「考える限り最悪の展開」をたどって、望んでいたとは全く逆の結果になる。『物理学者たち』と同じテーマの作品で、いかにもデュレンマツらしい短編である。

ところで、この『巫女の死』を、アルノルトはある対談で、「形をかえた、ブレヒトとの対決」(G.3.31)と捉えている。デュレンマツは否定していないし、80年に行われた別の対談では自らもっと明確に述べている。

でも、私は、そこ〔オイディプス〕に予言の問題を見ます。予言された未来から逃れられるのか。この問題を私はたとえば『物理学者たち』で提示しました。物理学者たちは、科学によって起こることを承知しています

し、それから逃れようとしています。これは『巫女の死』でもう一度使われました。神託自体はいたずら半分のお遊びなのですが、それがまともに取られるのです。これが、予言する巫女の問題です。彼女に対立する形で、将来を意識的に決定していこうとする予言者がいます。つまり、二つのタイプがあるのです。想像と戯れる者と、想像で世に影響を与えようとする者とです。これは、もしあなたがそう思いたいのなら、作家や文学者の二つの種類なのです。一方は空想をめぐらしてお話しをするのが大好きで、他方は何らかの影響を与えることこそが大事だと意識するのです。その時に、空想でお話しをつぐむ人も、意識的に影響を及ぼそうと思う人と同様に、大きな混乱を引き起こします。意識的であろうがあるまいが、結局、一緒なのです。いつも影響はあるのです。ただ、予定したようにはいかないだけなのです。(G.2.348)

想像と戯れる巫女がデュレンマツ自身で、「将来を意識的に決定していこうとする予言者」に当たるのが、世の中は変わるし変えうると取るブレヒトであろう。しかし、影響は「予定したようにはいかない」とあるように、テイレシアスの意図は「考える限り最悪の展開」をたどった。「今や忠実なクレオンがカドメイアを支配し、全体主義の国家を建設している。私が避けようと思っていたことが、現実のものとなったのだ」。これは、先ず間違いなく、ブレヒトが意図したものと大きく異なる、この対談が行われた当時の東ドイツの現実への皮肉だろうし、そういう点で、まさに、「ブレヒトとの対決」となっているのである。

V

以上、三つの問題に関して、『対談集』や『加担者』、『迷宮一題材Ⅰ-Ⅲ』でのブレヒトに関する発言を拾いながら、デュレンマツの考えを検証してきた。問題点(1)のテーマに関しては、『ガリレイの生涯』と『物理学者たち』のように、外から見ればほぼ同じ題材を扱っていても、デュレンマツの『アンティゴネー』

と『オイディプス王』の対比が簡潔に示すように、ブレヒトとの間には大きな資質の違いがあった。ただ、たしかに、影響は「予定したようにはいかない」ものだろうが、現実を批判的に検討し、何らかの理論に基づいて予測を立て、自らの意図を反映させようとするのが人間ではないのだろうか。

問題点(2)のブレヒトは科学音痴ではないかと、問題点(3)『ガリレイ』は1953年の「6月17日暴動」に対する「懺悔」ではないかという非難に対しては、それぞれの箇所の説明したように、かなり言いがかり的などころがあると思う。ともすれば下されるブレヒトのエピゴネン的評価に対する反発からなされたものであろう。

彼〔ブレヒト〕の政治的原則〔マルクス主義〕は、人間の機微に通じたものとして、だつて彼は策略と知恵が同義語であったあんなにひどい時代の出なんだから、知恵をめぐら

した策略として、あるいは、策略が生んだ知恵として必要な偽装の一つであったと、私はいまだ分からなかった。(WA.28.292)

デュレンマットは、晩年に、ブレヒトと出会った若い頃を振り返って、こう回想している。ブレヒトのことが実によく見えている言葉ではないか。

文学者はよくやることだが、デュレンマットも、作家デュレンマットとして自立するために、あるいは、自立するまではブレヒトを誤解も交えてこっぴどくたたいたが、ブレヒトのことはそれなりによく分かっていたのである。これは、『オイディプス王』と『アンティゴネー』という、簡潔ではあるが適切な対比を見ても納得がゆく。すでに亡くなってしまっていて、何の反論も直接聞くことはできなかったが、デュレンマットにとって、ブレヒトは一生よきライバルだったのである。

注

1. Daniel Keel (Hg.) : Über Friedrich Dürrenmatt. Dritte, verbesserte und erweiterte Auflage. (Diogenes. 1986) S. 39
2. ブレヒトとデュレンマットのテキストからの引用は、以下の全集と『対談集』による。略号のあとに、巻数、ページ数を続ける。
Bertolt Brecht : Werke. Große kommentierte Berliner und Frankfurter Ausgabe. 30 Bände in 32 Teilen und Registerband. (Suhrkamp. 1988-1998) BFAと略す。
Friedrich Dürrenmatt : Werkausgabe in 37 Bänden. (Diogenes. 1998) WAと略す。
Friedrich Dürrenmatt : Gespräche 1961-1990 in 4 Bänden. (Diogenes. 1996) Gと略す。
3. 「科学者と社会—デュレンマットの『物理学者たち』—」(繊維学部学術報告、23巻) S.13-22
4. 「宇宙氷説」は、オーストリアのエンジニアで天文学を趣味にしていたハンス・ヘルビガーという人物によって提唱された。その理論が世間に広く知られるようになったのは、1912年、フィリップ・ファウトという月を研究する在野の天文学者と共著で、彼が『氷河宇宙創成説』を出版したのを契機とする。ヘルビガーの理論は次第に信奉者を集め、彼らは一種のカルトを形成するにいたった。……擬似天文学と擬似形而上学のごたませである「宇宙氷説」の根本を成すのは、煎じつめれば、その名前が示すとおり、宇宙はH₂O、すなわち氷で満たされているという仮説である。そして、宇宙は、恒星の放つ火と宇宙を満たす氷の二元論的な闘争の展開する舞台として把握されていた。こういった仮説を基盤にヘルビガーは様々な奇矯な理論を唱えた……
「宇宙氷説」の根幹を成す火と氷の二元論は、とりわけナチの世界観に合致するものとして称揚された。すなわち、ヘルビガーの理論とは「北方的英雄的根柢姿勢」が実現されている「北方的世界像」であり、「相対性理論」と「宇宙氷説」の関係は「タルムードとエツダの関係に等しい」。そう、ヘルビガー理論とはアーリア=ゲルマン的科学的精華なのだ。……今や「宇宙氷説」

の完全な支持者となったヒムラーは、1938年にこう述べている。

私はあらゆる形態の自由な研究を、それゆえ「宇宙氷説」の研究を支持する。私はしかもきわめて熱烈にこの自由な〔「宇宙氷説」の〕研究を援助するつもりであり、この点において、最良の同伴者が存在する。なぜなら、ドイツ帝国の総統にして宰相であられるアドルフ・ヒトラーは、かなり以前から、科学の職人どもによって拒否されてきたこの学説の確固たる信奉者であるからだ。

ヒトラー自身が「宇宙氷説」の存在を知っていたばかりか半ば信じてもいたことは、幾つかの談話記録からも確認されている。たとえば、ヒトラーは「私はヘルビガーの宇宙氷説を信じる気持ちに傾いている。……………」と述べ、ヘルビガーの名前をプトレマイオス、コペルニクスと並べて語ってさえいる。

〈横山茂雄：『聖別された肉体—オカルト人種論とナチズム』（書肆風の薔薇）の258ページ～261ページから抜粋〉

5. Robert Jungk : Heller als tausend Sonnen. Das Schicksal der Atomforscher. (Rowohlt Taschenbuch 6629) S.82
6. H. ヴェーバー：『ドイツ民主共和国史—「社会主義」ドイツの興亡』（日本経済評論社）S.73-76
7. 『『ガリレイの生涯』と教育劇』（繊維学部学術報告、22巻）S.47-55

Brecht and Dürrenmatt

Summary

Because Brecht died in 1956, Dürrenmatt only met him twice. But Dürrenmatt continued to discuss Brecht all his life, and he always considered him to be a strong rival. Most of all, Dürrenmatt discussed the relationship between *Leben des Galilei* and *die Physiker*. Here, by reading Dürrenmatt's words, I try to clarify his thoughts on Brecht. I focus on the following three questions: (1) Is there a difference between the themes of these two dramas, even though both of them deal with the same problem regarding the scientist and society? (2) Is Brecht's scientific knowledge really untrustworthy? (3) Is Brecht's *Galilei* a confession of his betrayal?

The second question is that of Dürrenmatt's misunderstanding. *Leben des Galilei* was based on careful research. The difference between the two works was due to the amount of information the authors were able to obtain. The third question also concerns Dürrenmatt's misunderstanding. The phrase "I have betrayed my profession" was never a confession by Brecht of his dubious activities in the worker revolt of 1953, because Brecht had already used this phrase, spoken by the character Galilei, in the second version of *Leben des Galilei* (1944/45).

As for the first question, an accident plays an important role in Dürrenmatt's comedy. The theme is the Oedipus type situation of the scientist, making this work different from Brecht's tendentious drama. "Oedipus" versus "Antigone." Dürrenmatt's concise phrase suggests the diverse tendency of these two works.